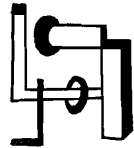


下人問答



安野 眞幸

A やあノ Bさん いらっしやいノ……どうぞどうぞ……ちょっと退屈していたところだったんだ。

B やあAさん、こんにはノ ところで君は「下人」について幾つも論文を書いたというけれど、どんなものを書いたのだい。

A 最初に「太郎冠者論——狂言における下人」、次に「藪入りの源流——もう一つの『魂の行方』」、また「下人と犯罪」の三つを弘前大学教養学部『文化紀要』(第二号(一九八五年十月)、第二三号(一九八六年三月)、第二四号(同年八月))に発表し、「説経節山椒大夫の成立——巫女の死と天皇の登場」を『列島の文化史』第四号(一九八七年二月)に、さらに「下人の初見参」を『日本歴史』(第四六七号一九八七年四月予定)に投稿したとなるのかな。

B 君にしては、それだけの数よく書けたネ。ところで、研究史の中では君の議論はどうなるの。「下人」は「領主制」との関係で論ずるのが戦後史学の基本的な枠組みだったよネ。

A そう……今、保立道久氏から『中世における愛と従属』(平凡

社、一九八六年)「彦火々出見尊絵巻」と御厨的世界」(田名網宏編『古代国家の支配と構造』東京堂出版、一九八六年)等々を頂戴し、大急ぎで目を通している所なのだけれど、一番印象的なことは、従属を示す肉体の身振りや儀礼を研究し、下人の姿をあれ程実証的に明らかにされた氏が、今改めて問題にしていることが、その領主制との関係なのだということですよ。——僕に言わせれば、従来の領主制の枠に囚われている限り、下人を実証的に問題にすることはできないし、下人論の深化のためには、戦後史学からの越境が必要だと思っわけです。

B そう断絶を強調されては……とりつく島もない……それでは、石井進氏が「主従の関係」(講座日本思想³ 秩序)東大出版会、一九八三年)において、今から二、三十年も昔の「和辻・家永論争」を始め、研究史の整理を行なっていますけれど、あれとの関係で少し述べて下さいよ。そうそう、そう言えば君の指導教授であった佐藤進一先生も、その論争に多少係わりを持っているのでしょ。

A このあいだ『仮名手本忠臣蔵』を見たのですが、七段目で「おかる」の兄・平岡平右衛門が「奉公こそ足軽なれど、御恩は変らぬ御主の仇」と言つて義士の仲間入りを頼む所で、大星由良の助は「三人扶持の足軽と千五百石取の自分を同列には考えられない。千五百石も取っているから仇討をするのだ、三人扶持にはその必要はない」と、主従制＝相務契約説をいう家永説ピッタリのことを言つて断わるのだけれど、劇の泣かせ所は、この平右衛門が妹「おかる」を殺し、その手柄で義士に加えてもらおうとする所であり、むしろ劇中で強調されているのは、平右衛門の「わずか三人扶持をとる拙者めでも、千五百石のあなた様でも、これまで繋ぎましたる命、御恩に高下はござりませぬ」なのです。

つまりネ、『忠臣蔵』が多少なりとも元禄期の社会を反映しているとするれば、日本における主従制のあり方として、家人型と家礼型の二つをあげられた佐藤先生のお考えは、やはり正しいのではないでしょう。ただ、この平右衛門の「御家意識」が、今世界中に喧伝されている日本企業の強さ、日本型労使関係にストレートに繋がるわけで、これを「封建的」として否定してきた家永説が現在、死語になっていることの方が、逆に気になるわけですよ。

B 昔、歴史学専攻でない私共の先輩達が『史学雑誌』(六二―三、一九五三年)の家永論文(家永三郎「主従道徳の一考察」)に感激したことなど、今読んでみて信じられないです。しかしあの論文を「マイ・ホーム主義」的な生き方の支えとして読み取った先輩のこと

が、私には妙に心に懸かっている……確かに石井氏の言われる通り、「献身の道徳」論(和辻哲郎「献身の道徳とその伝統」『岩波講座倫理学』岩波書店、一九四〇年)を「徹底的に粉砕して最後のとどめ」を刺すと言う戦闘的ポーズ程には内容がないです。

A 佐藤先生は、学問の世界では家人型と家礼型の二つのタイプを認めながら(佐藤進一・大隅和雄(共同執筆)「時代と人物・中世」佐藤進一編『日本人物史大系第二巻』朝倉書店、一九五九年)、価値の世界では「出処進退の自由」を持つ家礼型しか認めず、先生ご自身の生きられた世界もまた、そこにあったという点で、両先生には通底する所があったと思うのです。また詳しくは言えませんが、戦後史学の領主制論も、これと一脈通するものがあると思います。つまりネ、主従制の問題は結局のところ日本における組織論・人間関係のこと、主体性・自由の問題だと思つていますが、「下人は奴隷か農奴か」という基本的枠組み自体、研究者が主人と同じ立場に立って、「下人」を客体として見ているわけで……客体だから当然、主体性や自由は問題にならないというか……

B なるほど、それで「戦後史学からの越境」となるのです。ところで石井氏は「舞台がひとめぐりすると、西欧的かつ非西欧的の二つの潮流が交代・循環するのが明治以来の日本中世史のあり方だ」として研究史の整理を行なっていましたよ。今、例えば雑誌『国文学』一九八六年十二月号のタイトルが「忠臣蔵——日本人の証明」とあることから明らかに、家永先生達の活躍された

戦後という舞台は回ってしまったと思うのですが、いかがですか。

A いや——だから僕も、最も自由を奪われた奴隷的存在と言われる「下人」においても、自由はあった。祭りという特別な時間に、山や市や神社等特定の場所において自由を謳歌しえたと主張しているわけです。また下人自身の生きていた世界を明らかにするために、彼等の信仰とか、中世人の宇宙観コスモロジーの中に占める彼等の位置とか、中世から近世にかけての信仰や宇宙観の変化等を問題にしてみました。その点では佐藤先生と異なる世界が、多少は描けたと思います。

B それは、先程のどこで述べてますか。

A 下人も自由を謳歌しえたということは、最初の三つに共通しているのですが、特に「太郎冠者論」で、下人の信仰については「藪入りの源流」で、宇宙観の変化は「説経節山椒太夫の成立」で、それぞれ述べたつもりです。

ところで、先程の「舞台は回った」というお話ですが、僕にしてみれば、「古武士の如き」と言われる佐藤先生の生き方はやはり重いわけで……少なくとも僕等の頃の東大国史学科では、卒業を前に「予餞会」というのがあって、僕が三年のとき（一九六三年）、先生は卒業生に贈る言葉として「出処進退を明らかにせよ」とお話しになり、「内面的自由を支えるものとして、この言葉は大切だと思う」と再度繰り返されたので、よく覚えてるのだ。

B ずい分昔のことなのに、よく覚えてますネ、そういう点で

は、思想史ご専門でない佐藤先生の方が自由の問題を徹底的にお考えになっていったとなるのかな。

A しかし君の「舞台がクルリと回ったら」という交代史観はかなりきついネ。

B 夏目漱石は「現代日本の開化」の中で、開化自体、本来内発的なものでなければならぬのに、日本はそうならない。へ外発的だ（へ上滑りだ）と言ってますよネ。岸田秀氏の「精神分裂病としての日本近代」の議論を借りて言えば、西欧に対抗するために西欧から学ぶことを始めた明治の文明開化以来、日本は、西欧化をめざす「外的自己」と伝統的な「内的自己」への分裂が余儀無くなつた。だから家永さんのような戦後の「進歩的文化人」が外的自己を表わしているとすれば、次は内的自己の出番となるのではないですか。少なくとも、石井氏の議論からはそう言えると思います。それに、網野善彦先生のあの旺盛な御活躍を支えている危機意識もまた、ここにあると思うのですが……

A 僕はネ、和辻さんも家永さんも共に見ていなかった問題に、内弟子制度と云うか、服属の儀礼が弟子入りの儀礼と同じだということがあると思うのですよ。例えば落語家になる場合、親方は弟子に、和辻氏の言う「猷身の道徳」を要求し、奴隷的絶対服従を当然視していると思うのです。相撲なんかも同じではないかな。だから、日本の伝統的な技術や芸能の伝授等の世界では、絶対服従の関係にはプラスの価値が与えられており、弟子入りには主体性の契機

がある。……しかし、伝統的な弟子入りの場合「習う」は「做う」で、個性の否定、徹底的な模倣の反復で、「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」の諺のように、徹底的な主体性の放棄がそのまま主体性の獲得となるというような……ここが主体性を原理とする西欧文明と噛み合わないと思うのだけれど……さっき君の言った「外的自己」としての日本は、西欧に弟子入りし「献身の道德」を以て西欧になりきろうとした。一方、誠心誠意の西欧化が成功すればする程、弟子入りを支えていた内面的道德律、日本的主体性はその基礎を掘り崩され、根なし草になって行くことではないかな。

B 西欧文明に対して「献身の道德」を以てしたというのはおもしろいネ。しかし君の議論で漱石の言う現代日本の外発的開化という難問が解けるのかな。それに、「献身の道德」の擁護という点で、君は和辻さんに近付いていることになるのではないかな。

A 僕が強調したいのは、具体的な対象に対する主体的な帰依、「警戒に接する」ことの重要さなのであって、和辻さんの議論は献身の対象を抽象的な国家や天皇にスリカエていると思うのですよ。

漱石と言えば、このあいだテレビで『坊っちゃん』を見てショックだったんだ。あのマドンナが「新しい女」だったんだネ。昔読んだときは少しも気が付かなかったけれど。文明開化以来、次から次へと「新しい女」が現われる、開化を決意した親達に対して、異族としての子供達が常に対立する。例えば今の「新人類」という言葉も、戦後の復興を支えた「モウレッツ」型の親達から彼等が「開化し

てしまった異族」として見られているということ、昭和初期の「モボ」「モガ」と同じ位相にあると思うんだ。そこで一方では伝統の喪失や、国民統合の象徴が声高に叫ばれるようになる。しかし、ここが肝要だと思うのだけれど、支配者層や一部の有識者達から言われる「伝統」とは、さっき僕の言った伝統とは違うのだということだ。つまりネ、彼等が言う「伝統」とは、開化を決意した親達の内面的道德律を、常に別なものにスリカエているのだよ。明治の文明開化以来、伝統への回帰が不可能であるという漱石の言う「宿命」への洞察を欠いた、まやかしの議論なのだよ。そうした点で、和辻さんの言葉が心によく響いたとしても、それはやはり「甘い」議論だと思ふよ。

B しかし、今のような飽食の時代に、献身の対象を見出すことはやはり至難の業ではないかな。佐藤先生が一つの関係から主体性を持って「辞める」ことを強調されたらすれば、君は逆に主体性を持って一つの関係を取結ぶように言っているだけで、難しいことにかけては同じではないかな。ともあれ、主従制の問題が近代日本の抱えた難問と不可分であるということを、一応の結論として、今日は一先ず終りにしましょう。

A じゃー、さようなら。
B さようなら。

(あんの・まさき 弘前大学助教授・日本中世史)